創立130年 世界に羽ばたけ濟々多士!

三綱領

正倫理明大義
重廉恥振元氣
磨知識建文明

多士東京

NO.42
2012.5.26

発行／濟々黌東京同窓会・事務局
〒162-0822 東京都新宿区下宮比町2-18-705
TEL.03-3268-9525 FAX.03-3268-9520

平成24年5月17日印刷
平成24年5月26日発行
発行者／郷原友和
振替／00190-1-68705

昭和42年会責任編集

創立130年・黌歌100年記念号

濟々黌東京同窓会 インターネット・ホームページ
http://www.seiseiko-tokyo.jp/index.html

CONTENTS

会長挨拶　東京同窓会会長　斉藤惇 ……2
黌長挨拶　済々黌黌長　中西眞也 ……4
濟々黌今昔物語　泉田智宏 ……5
九皐会～東京同窓会の淵源～竹原崇雄 ……7
いま、済々黌に望むこと　足立昭七郎 ……8
黌歌「碧落仰げば」考―作曲者について―下村勝二 ……9
世界に羽ばたけ!「海外だより」……11
学年便り ……19
記念本「黌歌百年」について ……26
第四回OBゴルフ学年対抗戦……27
東京同窓会事務局長より　郷原友和 ……28
編集後記 ……28

濟々黌黌舎空撮（平成24年1月）

東京同窓会事務局長より

郷原友和事務局長

昨年は済々黌東京同窓会の会長、副会長の全員が改選される年となりました。同窓会の主力世代が段々と若い世代に移っていることが実感されます。また、現役大学生や社会人になったばかりの後輩達も積極的に会に参加してくれており、事務局長としては嬉しいばかりです。物怖じせず積極的に参加してくれる若い人達が多いことは、我が済々黌東京同窓会の誇りであると言ってもよいものでしょう。

さらに、昨年から、フェイスブック上で「済々黌東京同窓会」が立ち上がり、現時点で約2600人が登録しています。3000人を超えるのも時間の問題です。今までになかった交流ルートの開設であり、特に若年層の発掘には極めて効果的なツールになることが予想されます。

IT技術がここまで発達してきますと、同窓会の運営方法、同窓生同士のコミュニケーションのあり方も劇的に変化していくものと思われます。私自身はIT化前の同窓会の運営にも深く関わってきましたし、今後の運営にも暫くは関与していく予定ですので、今の同窓会が将来どのように変化していくのか、興味もありますし、期待もしております。

私の事務局長としての今後最大の役目は、この従来の形の同窓会と新しい形の同窓会との融合にあるのかもしれません。

済々黌東京同窓会事務局長　郷原友和（昭和53年卒）

編集後記

2011年3月11日、あの未曾有の大震災が東北三県を主に、東日本を襲いました。あの大震災から早一年が過ぎ去りましたが、復興は未だ先が見えない状況です。また、4年以内に震度7クラスの大地震が首都圏を襲う確率が高くなったとの報道にも接する今日この頃ですが、東京同窓会の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。「多士東京」42号を皆様のお手元に無事お届けできることうれしく思います。

さて、2011年7月9日(土)に開いた東京地区42年卒の集まりである「七夕会」で、上野代表幹事より「多士東京」42号の編集は我々42年卒が担当するとの報告がありました。編集委員は下村編集長を始め上野代表幹事、それに女性2名を含む8名でスタートし、8月27日、第1回の編集会議を開きました。第41号の表紙の新黌舎外観を考慮し、本年は濟々黌黌舎の空撮写真を入手し、第42号の表紙を飾ることにしました。また、2012年が創立130周年にあたり、多数の同窓多士が海外で活躍していることを踏まえ、同期生から公募した「創立130年　世界に羽ばたけ濟々多士!」をキャッチコピーに選定しました。本年が創立130周年で、また、黌歌制定100年にあたることから、特集として、①創立130年、②黌歌制定100年、③九皐(きゅうこう)会についての記事を企画しました。①は泉田先生（S36）、③は竹原先生に執筆を依頼したところ、いずれもご快諾を得ました。なお、②は編集長の下村が執筆しました。「世界に羽ばたく」をキャッチコピーに採用したことから、海外便りを企画し、本黌の上海、ハワイ、ロスアンゼルス各支部からご寄稿いただきました。また、海外に在住していた42年卒の同期生が、在留当時のことを執筆してくれました。若い同窓多士が世界に羽ばたく際の一助となることを願っています。学年便りでは8名ほどの先輩、後輩多士からご寄稿いただきました。個人的に原稿をお願いした中には、我々42年卒の担任で、また、先輩でもある足立昭七郎先生（S26）がおられます。ご高齢にもかかわらず、快くお引き受けいただきました。また、渡辺（S26）、沖村（S27）、岩永（S28）、尾浦（S29）等の先輩からもご寄稿いただきました。

8月27日の第1回の編集会議以降、ほぼ月に1回の割合で集まり、手分けして原稿依頼、原稿の整理、そして編集作業を行い、何とか無事に第42号の発行に漕ぎ着けました。これも快くご寄稿いただいた先生方、諸先輩、同窓多士のお陰であり、ここに深甚なる謝意を表す次第です。最後になりましたが、編集委員一同、母黌と濟々黌東京同窓会、そしてこの「多士東京」のますますの発展と、同窓多士のさらなるご活躍をお祈りいたします。

（執筆／田川彰男）

編集委員／安部誠子　池田久利　上野倫義（代表幹事）　栗崎泰爾（幹事）　田川彰男　本嶋公民　森山由紀子（幹事）　編集長／下村勝二

会長挨拶

斉藤 惇
東京同窓会会長（昭和三十三年卒）

百三十年前に済々黌が出来た時代から今や大きく時代が転換しようとしているように思えます。

佐々友房先生は正に当時の英米勢力の拡大を身を以って経験し、将来の日本のあり方を見出すために新しい教育の必要性を痛感されて母校済々黌を作られたのだと思います。

１７６９年スコットランドでジェームズ・ワットによって生まれた最新型の蒸気機関は、それまでの地政学上の世界勢力のあり方を大きく変え以後二百年余にわたって白人、西欧文明優勢の体制を作ってきました。

彼らの優れていたことは単に生産力の支配を楽しんだばかりでなく、民主主義・市場主義を基盤とする文明社会の制度を作り上げたことであります。

それは単に政治統制制度のみならず、資本主義という凡そ普遍性の高い経済制度を開発したことであり、そのことによって欧米型キリスト教国家が長期にわたってこの地球を支配する基となりました。

キリスト教を基盤とする倫理観と、身分格差の大きかった農業から解放された工場労働者を、大量に吸収するという工業経済行為との合体が、英国を中心にして民主主義、資本主義という現実的でかつ理想主義的思想を生み出したと考えられます。

この民主主義的資本主義に対して、歴史上何度か厳しい挑戦が行われました。

それはドイツや日本による国家主義の挑戦や、ソ連や中国による統制型社会主義体制の挑戦が特に記録されております。

しかしアングロ・アメリカン型の市場主義と資本主義を基盤とする産業力、即ち軍事力と高等教育を生かした柔軟性、対応性の前にはこれらの全体主義的挑戦の全てが敗北してきました。

この大きな歴史的有り様がいま二百三十年振りに転換しようとして、地球上のあらゆるところで新秩序を模索し、うねり、苦悩しているように見えます。

この最初の切っ掛けは非常に皮肉なことですが、１９９０年以降に起きた資本主義や市場主義の完全勝利でありました。欧米優先の巧妙な策謀や企画が、細々と持ち続けていた社会主義国家群や、発展途上国という形で欧米型の富に恵まれなかった多くの国々を、ほぼ完全に彼らの軍門に屈服させました。

その結果、膨大な人口を擁したこれらの後進諸国が市場主義、資本主義型経済に合流してきたのです。

市場型資本主義経済は、丁度過去二百年間欧米が凌駕してきたと同様に、新しい参入国家にとってもその生産能力の高さや富の構築を確かなものにすることを証明しました。

このことは、今後わが国の体制構築において決して忘れてはならないことであります。

しかし、新しく市場主義や資本主義に変節して飛躍的生産力と富の構築に挑戦しつつある新参入国家は、必ずしも民主主義や自由主義を伴っているとは限りません。

特に最大の躍進国家である中国は資産も生産手段も国家が所有し、経済活動成果の評価に資本主義を利用するという国家資本主義を遂行しています。彼らは国民一般の民主主義的生産や分配を許容することなく、生産活動を通して国家資本の最大利得を目的とした経済体制を敷いているということです。

一方二百年の栄華を支配した先進型民主主義、市場型資本主義国家群は、生産能力の絶え間ない向上による生産過剰問題と、生産活動への参入を終えた老齢労働者に対する社会保障原資の不足問題に遭遇しております。

市場型資本主義経済が必要としてきた大きな非生産的消費国家が今や競争的生産型国家に転じたという変化は、今後過剰生産、過剰供給が地球規模的問題に発展するのが避けられないということでしょう。

先進型国家が消費市場の消滅に伴って生産力を落とすことによる富の減少は、老齢化した労働者への福祉資金の欠乏を益々生むことになるでしょう。

同時に民主主義を伴わないで市場型資本主義体制を国家による遂行手段として採用し、急速に生産力や富を積み上げ始めた中国やロシアのような新参入国家群は、生産手段を占有する国家そのものが汚職や権力闘争によって混乱に巻き込まれて崩壊し、最終的には生産手段の保有が国民の手に移るまで、不安定な試行錯誤を繰り返すものと思います。

アジアの巨大な新参入国家に囲まれているわが国は、過剰生産に遭遇することが避けられない彼らの挑戦的な市場開拓活動の犠牲にならないための心掛けが必要でしょう。

更に世界全体が真の市場経済理論を生かして、生産と需要のバランスをとるような協調体制を構築する必要があるように思います。

これからは過剰な生産力拡大や市場支配ではなく、需要に合わせた生産モデルが基本となり天然資源の効率的活用、食料の平和的分配、健康衛生など安寧といった物質的富に代わる価値観の創出が人類の重要な課題となるでしょう。

丁度欧米諸国が十八世紀初期から生産力の競争に打ち勝って世界支配を続けてきたように、今からは非物質的価値観を創出し、そのための技術や政策を敷衍的に遂行できる国が世界の尊敬を集め、そのことが力になる時代が来つつあるように思えてなりません。

省エネ技術開発、医療技術向上、安全食品の開発、オープンな金融市場の構築、安全健康住宅の建設や広い意味の芸術などが具体的なイメージとなります。

アメリカとインドを除く殆どの国が急速な人口減少と老齢化に向かい、生産力だけを拡大して、増大する福祉資金を手当するという二十世紀型社会制度の維持は、日本だけでなく中国もロシアも韓国もみんな不可能であることは明白です。

老齢化が先行する日本は、率先して新しい世界の有り様を示す運命にあるように思えてなりません。

そこで一番求められるのは人材育成であります。

「鉄は国家なり」の時代は去り、「人材は国家なり」の時代が来ています。世界的視野と人類愛を持った自己犠牲のできる有能な人材が何人いるかが、今後その国の地政学的地位を決めると確信しています。

願わくはこのような人材が故郷熊本から、なかんずく済々黌から輩出されることを祈って止みません。

黌長挨拶

中西眞也　濟々黌高等学校 第二十九代黌長

本黌の現況について

東京同窓会の皆様には、本黌教育推進のために温かく見守りいただくとともに、ご支援をいただいておりますことに、まずもって感謝申し上げます。

黌長を拝命して1年が過ぎようとしておりますが、同窓会の皆様をはじめ、生徒や保護者、地域の方々の期待の大きさをひしひしと感じつつ、黌歌にもありますように、終始一貫かわらざる建学の精神である三綱領を根幹とした目標を掲げ、生徒一人一人が、本当に進みたい道に歩み出し、将来大きく開花するための基礎づくりとして、徳体知の三育併進に努めているところです。

さて3月1日の卒業式は、東京同窓会会長の斉藤惇様、同幹事長の石原純様をはじめ多数の各地区同窓会役員の方々に御臨席を賜り、厳粛かつ盛大に挙行することができました。式の最後には、三綱領を唱和し、そして黌歌を天まで届かんばかりに歌い上げ、411名の卒業生が本黌を巣立っていきました。三綱領と黌歌は、本黌生としてのアイデンティティを感じさせ、精神を奮いたたせます。卒業生には、どのような苦難に直面した際も、胸に刻みつけ体の一部ともなっている三綱領の実践に努めてくれることを願うものです。

さて、卒業生の進路については、生徒の努力が実を結んだ年でありました。東京大学1、京都大学2、大阪大学10、九州大学40、熊本大学89をはじめ国公立大学に244名（実数）、また早稲田大学3、慶応大学1をはじめ私立大学に206名（延べ数）など、部活動と学業の両立を立派に成し遂げてくれました。

部活動につきましては、昨年の夏の全国高校総体に空手道部、ソフトテニス部、陸上競技部の3つの部が出場しました。また新チームとして臨んだ秋の新人戦では、ソフトテニス部、陸上競技部、漕艇部、水泳部、水球部が九州大会出場を果たしました。現在、6月に行われる高校総体に向けしっかりと力をつけているところです

野球部は新チームになって、春の選抜出場をかけた秋の熊本大会で、その後、甲子園出場を決めた九州学院に0-2で惜敗をしました。こしばらく甲子園出場から遠ざかっていますが、着実に力をつけており、内外から現在のチームに大きな期待が寄せられています。

文化系の部活動も近年活躍がめざましく、吹奏楽部と弦楽部がオーケストラを編成して臨んだ県大会で、初めて熊本高校を破り視聴覚部とともに熊本県代表として、今年の夏、富山で行われる全国高校総合文化祭に出場することとなりました。

このように、生徒たちは先輩方の築かれた伝統を引継ぎながら、「徳体知」のバランスを重んじ、学業、部活動や学校行事に取り組んでいます。このような伝統に憧れ、今年の高校入試でも熊本県下で最も多くの中学生が受検しました。多くの中学生が本黌を希望してくれることに対し、大変有り難く思うと同時に、責任の大きさも深く感じます。生徒、保護者の期待に応えるべく、創立130周年を契機とし、一層の教育活動の充実を図り、更に本黌が発展するように職員一丸となって頑張っていく所存です。

東京同窓会の皆様の、温かいご声援をお願いし、報告にかえさせて頂きます。

濟々黌今昔物語

泉田智宏（元英語科担当・昭和36年卒）

泉田智宏先生

私は濟々黌に昭和三三年四月に入学した。本校が春の選抜野球大会に優勝して熊本市全体が祝賀ムードに沸いていた頃である。私たち新入生も入学式翌日にチームの歓迎に熊本駅に行った。それが生徒として三年間、教師として二十三年間、計二十六年間にわたる濟々黌との関りの始まりだった。

今年は濟々黌創立百三十周年という節目に当たる。明治十五年二月十一日に私立濟々黌が創立されて現在に至るまでの長い歴史の中で、私が関わったのはごく最近の短い期間であるが、私の人生の大きな部分を占める長い期間だった。在学中、在職中の思い出のいくつかを述べて濟々黌というものを改めて考えてみたいと思う。

昭和三三年春、本館はまだ二階建の黄壁城だったが、翌年それは解体されて三年生の時にキナ線が一本入った三階建となった。本校生の不勉強はよく言われることだが私の在校当時も勉強しない、あるいはしないふりをする生徒は多かった。

不勉強で正座させられ廊下まで延延と正座の列が続くことがあった。卒業アルバムにも「正座正座で半年や暮らす後の半年や寝て暮す」など各クラスで正座の文字が踊っていた。勉強ばかりでは濟々黌でないと言って不勉強の言訳にしていたと言えなくもなかった。当時木造の北校舎二階廊下から九州女学院の女学生の姿を遠くに見て胸をときめかしていた。私たちの学年には女子が十三、四名しかいない時代だった。

大学受験の時には当時広島カープの投手だった井先輩方に泊めてもらい入学後もよくお邪魔した。大学には同窓の教授が二人おられたが、ご自宅へ先輩に連れていってもらい、よく夕ご飯を頂戴した。貧乏学生の私には本当に有難いことだった。友枝竜太郎教授宅の床の間に三綱領の掛け軸がかかっているのに感激した記憶がある。

昭和四一年、母校に勤務することになった。私の恩師もほとんど残っておられて、私は職員室に出入りする時に生徒時代の一礼する習慣がなかなか抜けなかった。旧制中学時代から本校の職員だった金津安貞先生、「少年！」と生徒に呼びかけては授業よりお話のほうが多かった体育の中島桂介先生、養護の村上ユキ先生など、接しているだけで本校の長い歴史を感じさせる先生方がおられた。

私を「先生」ではなく「先輩」と呼ぶ生徒もいた。中には元気よく挨拶する生徒がいるから返礼したら、実は私の後ろにいた部活の先輩に挨拶していた、というようなことはしばしばだった。本校生にとって先生より先輩の比重が大きい感じがした。

本校では昭和三十六年十一月に下駄履き禁止となっていた。私は三年間下駄履き、高下駄履きの生徒だったから残念な気持ちだったが、時代の流れには逆らえなかったのだろう。

現在三綱領の額が各教室に掲げてあるが、昭和三九年に生徒たちの提案でそれが登場したと聞いている。三綱領といえば終戦直後アメリカ軍の占領時代、本校に視察に来た軍政

官に「大義」の意味を聞かれてgreat social serviceと当時の英語教師が名通訳をしてその場をしのいだ有名なエピソードがある。極東軍事裁判で同窓生が死刑判決を受けるほどの戦前の本校の教育綱領だったから、軍政官も彼らの母校と三綱領には関心があったであろう。

私の最初の勤務の十五年間は太平洋戦争敗戦直後にも劣らぬ変遷、激動の時代だった。昭和四四年、長い賛成反対の討議の後に長髪が許可された。バンカラ丸坊主の濟々黌の終焉だった。大学紛争の影響が高校へと及びつつある頃だった。

昭和四六年の卒業式では学校を批判する造反答辞が出た。その年の秋、行幸記念式典の「行幸」に反発して生徒数十名が式典をボイコットした。昭和四七年から式典は無くなった。三綱領の中の「大義」に忠君愛国を感じて異議を唱え、更には恩賜記念大運動会の「恩賜」等、思想信条にかかわるデリケートな文言が問題化した。毎年行事が近づくたびに教師側と一部の生徒たちとそのような文言を「省く」「省かない」で対立した。校内でビラを配ったり立看を立てたり、それが撤去されると我々に抗議したりの繰り返しだった。

学校に抗議する生徒たちに反対派の生徒たちが糾弾に押しかけ侃々諤々の議論をすることもあった。そこには教師が中に入れないような熱い雰囲気があった。

確かに本校は熊本で一番古い歴史を持ち、恩賜金を戴き、天皇が行幸された伝統校である。しかし、まさにそのことに当時「過去の栄光や伝統と言うより戦後の社会の現在の濟々黌をどうするかが大事なのだ」と生徒からの問題提起があり、それに対する賛否の議論が起こった。今振返ってみれば、高校生徒のレベルを超えた難解な問題を軸に、対立しながらも同じ濟々黌生として活き活きと高校生活を送っていたように思う。

創立九〇周年と百周年記念式典の二回にわたり、時の文部大臣が祝辞を述べに来校された。地方の一県立高校の行事としては異例のことであり光栄なことであると思う。その九〇周年記念式典で祝辞を述べられた稲葉文部大臣が生徒代表として挨拶した田浦芳孝君を「素晴らしい生徒がいる」と褒めておられたと耳にして担任であった私もとても嬉しく思ったことを覚えている。

その後も帽子自由化要求など起きて、よくも悪くも「自由な濟々黌」という実態だった。

それから十四年を経て平成七年、二度目の赴任をした。世の中も変わり本校の生徒気質も変わっていた。女子のスカートが膝上何センチか物指で測ったり、ルーズソックスを没収したり、改造した学ランやシャツの検査等で校門に立った。キナ線の帽子も被っていなかったので襟章が無ければどこの生徒かわからなかった。平成十一年に胸ポケットの上に細いキナ線を入れた制服が制定された。朝、夕に全員課外が始まり、勉強はかつてとは比べものにならないくらいするようになった。大学への現役合格率も上がっていった。

先輩と後輩の絆ということで忘れてならないのは、日露戦争の時、同窓兵士に本校生が都合四回慰問状を出し、それに対して井芹経平黌長や生徒宛に戦地から四四三通の手紙が来たことである。その内容は多岐にわたっているが、それぞれに母黌、後輩に対する熱い思いがにじみ出ている。

同窓生の絆の強さ、強い団結は現在も確かにある。そこでは個人の思想信条は問わない。この伝統、校風というか濟々黌魂というようなものは平成の生徒にも受け継がれている。それは主に部活動の中で養われていると思われるが、部活動をしていない生徒にとっては、

長い濟々黌の歴史、先輩の活躍と後輩への思いやり、学校行事のたびに行う「三綱領」唱和、「碧落仰げば偉なるかな」と声高らかに歌う校歌、それらが先輩と後輩の間を結ぶ、見えない黄色い一本の絆を生み出しているのかもしれない。

九皐会～東京同窓会の淵源～

竹原崇雄（元国語科担当）

竹原崇雄先生

大正の末年頃、東京には九皐会（キュウコウカイ）と名づけられた濟々黌同窓会があった。明治の同窓会以来途絶えようとしていたその一滴の雫が川の流れを形成して現在につながっているのではないか。遠い回想の中に心地よく浸るのも遠慮の要らぬ「同心の友」の特権である。

濟々黌には黌歌制定以前に、恩賜記念式歌（日清戦争後の軍歌「勇敢なる水兵」のメロディーで歌われたとの言い伝えあり＝「創立五十周年記念多士」四七九頁所載）があった。

一　東を仰げば阿蘇の山　国の鎮めと天そそり　西に臨めば不知火の　心つくしの海深し…で始まり、東京同窓会九皐会の会名の由来となった語が、次の一節にある。

六　鶴九皐に鳴きぬれば　其声み空にひびくなり　今日は如何なる今日の日ぞ　四十九年の其の昔（創立五十周年時の歌詞）

この歌は九（番）まで続くが、阿蘇、熊本城、立田山、白川と歌い、多士の忠誠勤勉なる様が評判となり上聞に達し、恩賜が下され、その栄誉を忘れることなく三綱領を基盤に歴史を刻んでいこうという、一連のものとして作詞されている。

この恩賜記念式歌について「濟々黌と音楽」との無用の摩擦を生じ揶揄の対象となることもある。団結と排他は微妙な関係である。そこのところを我々濟々黌同窓生は強い結束を誇るゆえに自戒しなければならない。同窓生同士の強い団結と、他者との調和ある関係が将来も長く続いていくことを念じて筆をおく。

しかしその団結の美点も一歩外れると他者

熊本高校に勤務していた時、江原会の当時の水野重任会長が一致協力して事に当たる団結の重要性を生徒たちに話される中で、濟々黌に言及されていた。それを聞いて同窓生の一人として密かに誇りに思ったものである。

と題して、小川善春委員が「五十周年記念多士」に次のように記している。

〈井芹校長の意思で、先ず記念式に歌うべき記念式歌が制定されたとのことだ。明治三十四、五年の頃だろう。内芝御風氏の作詞によるそうで、優勝旗行進曲も同氏の手でやはりその頃出来たそうだ。曲も古い。黌歌はその後井芹黌長が、現五高教授である山形元治氏の作詞により先生の理想を表現されたものであって、その中にあふれる精神こそは濟々黌魂の本領であろう。〉

「恩賜記念式歌」の作詞者内芝二男童先生は明治二十九年に国語の教諭として赴任され、名を御風ともいっておられたようである。旅順陥落祝勝会の歌など作っておられる。明治四十五年の創立三十周年記念多士には山形元治先生作詞の黌歌が譜面とともに掲載されているが、内芝先生の「濟々黌の歌」と題する詩

も載っている。

東京同窓会九皐会の名称の出典となった恩賜記念式歌の「鶴九皐に鳴きぬれば」の一節は、済々黌の黌名の出典と同じく、中国の古典『詩経』から出ている。「鶴鳴」と題する詩で、関係する一節を書き下し文で示せば「鶴九皐に鳴き　声天に聞こゆ」とある。折れ曲った奥深い沢に鶴は鳴き　その鳴き声は天にも届く」の意で、一篇の詩としては「沢の鶴や渕の魚のように世に隠れた在野の賢人を迎え豊かな国土とし、この地に嫁ぎきた娘も立派な妻となって繁栄する」ということを喩えたものと解説されている。

この詩を要に据え、九州・熊本で学ぶ済々多士の評判が天聴に達し、将来に向かっての隆盛を予約する祝祭の歌を内芝先生は書かれたのであろう。

九皐会の会員の方々の思いも、内芝先生の思いと重なっていたに違いない。現在の東京同窓会の繁栄の源泉の一滴を、この九皐会に求めることが出来るかもしれない。源泉の水を掌に酌み、味わうことによって、伝統は厚みを増し、現在を生き抜く新たな活力が生まれることを期待したいのである。

特別寄稿

いま、済々黌に望むこと

足立昭七郎　元英語科担当　昭和26年卒

足立昭七郎先生

私が中学済々黌に入学を許されたのは昭和20年5月のある日のことである。神奈川県立横浜二中からの転校生であった。敵の爆撃で家が崩壊してしまい、仕方なしの疎開であった。しかも私は神奈川県津久井郡の山村に学童疎開をしていて、中学受験のために横浜に帰った直後に爆撃を受けたのである。横浜二中には合格したが、一週間後には転校の手続きをしなければならなかった。それと前後して東京大空襲、硫黄島玉砕と続き、戦局はまさに急を告げるものがあった。

さて、熊本には済々黌と熊中という中学があると聞いていた。母の里、熊本の親族は全員が済々黌行きを勧めた。父（その頃、フィリピンのセブ島守備についていた）の里は大分の九重町で、親戚の中に五高生になった者が数名いて、彼等は何故か強く熊中を勧めていた。結局私は熊本の側に立って済々黌に行こうと決めた。

済々黌での授業は数ヶ月続いただけで、その後は他の中学同様、授業の時間はすべて勤労奉仕に割り当てられていた。私達は大池（菊池郡）農作業に精を出した。昭和20年8月9日の正午頃、よく晴れた雲仙方面の空に白い雲が浮かんだ。長崎の原爆投下である。それから数日にして戦争は終わるのである。

昭和26年3月、私は済々黌高等学校を卒業し、熊大（法文学部英語英文学専攻）に入学する。熊大を出てからは済々黌で担任していただいた池田照先生のお世話を頂き、熊本の第一高校に就職することが出来た。（池田先生は当時、第一高校英語科の主任をしておられた）。その11年後の昭和37年に母校済々黌に転勤することになる。

卒業生と言えども母校で教鞭をとるということは又とない僥倖なのである。昭和42年7月20日の毎日新聞はその「教育の森」という欄の中で「済々黌のキナセンは熊本の誇りである」という主旨の事を書いているが、この記事は母校に勤める私の気持ちを代弁するものであった。

生徒達は皆純朴で良き生徒達であった。彼等は学校に誇りを持ち、キナセン帽はその象徴であった。彼等の表情は明るく伸び伸びしていて、彼等の生活態度は礼儀正しかった。

今はキナセンの帽子を見ることもなくなり、又運動部が紙面を賑わすこともなく、淋しい限りである。私は済々黌に元気がないと熊本の教育はよくならないと信じている。もう少し東大に行って欲しいし、昔の水球、野球のように日本一を目指して欲しい。済々黌は文武両道に長けた存在として全国にその名を知らしむべきなのである。

済々黌は今でも少年少女達に人気があり、あこがれの的である。だからこそ彼等が入学後も学校を誇りにする何かがないといけない。このままではいけないのである。Quo vadis Seisei?（済々黌よ、どこへ行く？）――これは常に私の頭を離れることのない関心事なのである。

黌歌「碧落仰げば」考――作曲者について――

下村勝二（昭和42年卒）

猪瀬久三（北方小学校提供）

済々黌黌歌に関しては、平成24年2月末に刊行された竹原崇雄先生の著作「黌歌百年」に書き尽くされている。ここでは作曲者の猪瀬久三に的を絞り、その横顔に迫ってみよう。

■作曲者・猪瀬久三

時を越え、世代を越えて歌い継がれる黌歌『碧落仰げば』。名曲の誉れ高いこの黌歌が披露されたのは、明治45年5月26日の創立30周年記念式典の席だった。厳かな中にも明るく軽快な、若者の迸るようなエネルギーも感じられるこの黌歌が初めて歌われたとき、式場はきっと沸き立ったことだろう。

日本全国に数多くの高校があり、それぞれ格調高い校歌を持っているが、わが済々黌歌は中でも抜きん出ている（独断と偏見でそう思う）。この名曲『碧落仰げば』を作曲した猪瀬久三とは、いかなる人物だったのか。

猪瀬は、明治44年3月に東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）甲種師範科を卒業、卒業と同時に、熊本の熊本師範学校に音楽教師として赴任した。明治45年（明治は45年7月30日まで。7月31日から大正元年）までの勤務実績が明らかとなっているが、正確に何年まで勤務していたのかは不明だ。その2～3年後の大正4年頃は、島根県松江市にあった「島根県師範学校」の音楽教師だった。恐らく、熊本の後はすぐに松江に移ったのではないか。

知られているように熊本師範学校在職中、中学済々黌でも音楽の教鞭を執り、折からの黌歌制定の動きの中で求められるまま黌歌の

作曲を手がける。それは明治44年から45年にかけてのことだった。

彼は明治31年4月、旧制の茨城県立下妻中学(現・下妻第一高校＝下妻一高)に入学、同36年3月同校を卒業した。旧制中学入学時の年齢は13歳だから、生まれは明治19年前後頃かと推測される。昭和45年の段階で、「猪瀬氏は数年前に亡くなった」という話が、ある場面で語られている。そして下妻一高の卒業生(同窓生)名簿には、昭和30年代の物故者として猪瀬の名前が出ている。これらを勘案すると昭和38年か39年ごろに亡くなったものと推測される。享年77前後ではなかったろうか。

下妻中学(旧制)は、明治30年4月に茨城県立尋常中学下妻分校として開校され一回生が入校、5年後の明治35年3月に、第一回目の卒業生を送り出した。猪瀬はその第2回目の卒業生である。東京音楽学校にいつ入学したのか定かではないが、この時期の甲種師範科の修業年限は予科1年を含めて3年だった。なので、明治41年4月には入学していたものと思われる。では、中学卒業から東京音楽学校入学までの5年ほど、彼はどこで何をしていたのか？　この5年ほどのブランクが気になるが、詳細は不明だ。

東京音楽学校入学時すでに20歳を過ぎていた猪瀬が進んだ学科・甲種師範科は、文字通り音楽教師を養成する学科だった。当時の東京音楽学校には、予科、器楽科、本科、そして師範科があり、師範科には甲種と乙種の2コースがあった。甲種は中等・高等教育機関での音楽教師の資格が、乙種は初等教育機関での音楽教師の資格が得られた。

済々黌黌歌を作曲したとき、猪瀬は二十代半ばという若さだった。湧き立つような高らかな音の響きには、前途に夢を抱く猪瀬の高揚した気分が反映されているかのようだ。弱冠二十代半ばの若者によって済々黌黌歌は作曲された。このことは記憶されてよい。

熊本師範学校を去った後の猪瀬の消息はよく分からない。断片的に分かっているところでは、前出の島根県師範学校音楽教師のほか、大正12年(1923)頃、横浜市の教育指導員(現在の教育委員会指導主事)を務め、大正13年から昭和4年まで横浜市内にあった北方小学校(今もある)で校長を務めていた、ということくらいだ。その当時の大正13年には米国の音楽家テーラーの『唱歌指導の新思潮』を翻訳出版している。

一方で、童謡『コヒノボリ』の歌詞に関する猪瀬のエピソードがあるが、これらの話は池田小百合さんの『Webサイト　なっとく童謡・唱歌』に詳しい。ちなみに『コヒノボリ』は小出浩平作曲とされていた通説が覆り、現時点では作曲者不詳だ。

大正11年(1922)に「日本教育音楽協会」という団体が設立された。これは小山作之助、島崎赤太郎、松島つね、福井直秋ら12人が理事となって設立された音楽教育に寄与するための団体だが、猪瀬は昭和6年ごろ、ここの事務主任の立場にあった。理事の一人の福井直秋は武蔵野音楽学校(現在の武蔵野音楽大学)の創立者であり、福井自身も東京音楽学校の出身だった。猪瀬の消息については、このように断片的なものばかりだ。

猪瀬は済々黌黌歌『碧落仰げば』のほか、東京都立両国定時制高校校歌『校旗光あり』(昭和10年)、島根県松江市立雑賀小学校校歌(大正4年)を作曲した。雑賀小学校は戦前の首相、若槻禮次郎を出した松江市内の由緒ある小学校である。校歌の作曲で分かっているのはこの3校だけだが、あるいはもっと作曲しているのかもしれない。今後、済々黌黌歌の作曲者である猪瀬久三についての、より詳細な調査が待たれるところだ。

世界に羽ばたけ・海外だより

「上海支部便り」

國武作好(平成13年卒)
上海

2010年4月13日、申という字が中国語で上海を意味することから「申黌会」と名づけ、僅か4名で開始した上海済々黌同窓会。初代会長にはS63年卒の岡村峠先輩(水球部)を迎えての始まりでした。現在2011年12月、会員数は9名になり、2桁の会員数までもう1歩となっています。会員には国際線パイロットや公務員または留学生と国際色豊かな面々となっています。現在は3ヶ月に1度集まり互いに仕事等の話をしながら海外生活の中で故郷熊本を思い出しています。当然、済々黌時代の話が主ではありますが…。

発足後すぐに同窓生の上海赴任者が現れ、順調に会員が増えるかと思っていた矢先、わずか4ヶ月後、会長岡村先輩より日本への帰任辞令を受けたとの報告があり、同年9月より急遽、H4年卒の阿金隆弘先輩(弓道部)を会長に迎えての第二期、申黌会が始まりました。企業等よりの赴任者が多数である為、任期内での役員変更も海外ならではの特徴でもあります。

平成10年、黌校1年時に修学旅行で行った中国、北京。私にとって、それが中国を初めて訪れた時でした。わずか数日間の体験でしたが、その経験が無ければ、今の自分はどこで何をしているのだろうと、ふと考えることがよくあります。

初めて行く海外、初めて行く中国、初めて目にする日本とは違う景色、建物等、目に入る全てが初めてで、その時から中国に関心を持つ様になりました。黌校卒業後、大学では中国語を専攻し、平成17年には北京へ語学留学。

大学卒業後は中国と関係のある仕事がしたいという思いから、「味千ラーメン」を展開している重光産業(株)へ入社、入社後すぐに上海へ赴任。気が付けば既に4年半が過ぎました。業務内容は工場勤務を経た後、品質管理部へ異動、現在は中国国内にある約650の店舗や12箇所の自社工場へ足を運び、熊本と同じ豚骨ラーメンの味がするか、新鮮な野菜を使っているかどうか等を検査しています。店舗スタッフはもちろん中国人、食品に対する衛生観念、接客サービスの意識の違い、生活習慣や食習慣の違い等、日本の常識が中国の非常識であることも度々です。

テレビで見ることの出来ない本当の中国、世界第2位となったGDP成長率を支える裏で高級マンションに住む人々、逆に物乞いをして暮らす人々。現地で暮らさなければわからないことばかりです。

現在、申黌会での主な活動は3ヶ月に1度集まり、様々な美食を食べ歩いています。上海市内には5万とも10万人とも言われる日本人が長短期に暮らしており、日本と同じ様に日本食も食べることも出来ます。また欧米や中東からの人種も多く、熊本では食べることのなかったインド料理やイスラム料理等、様々な各国料理を食べれるのも国際都市上海の魅力ではないでしょうか。普段は上海市内のレストランにて会合を開いていますが、前回10月には上海蟹を養殖している湖まで行き、本場の上海蟹を食べに行きました。楽しいことばかりではありませんが、上海済々黌同窓会「申黌会」として先輩や後輩と楽しい上海生活を楽しんでいます。

卒業してからも楽しい「済々黌」に入学出来て良かったと思う今日この頃です。上海にお越しの際は是非ご連絡下さい。皆でお待ちしております。

上海支部メンバー集合写真

「22年間のネパール往還」

大矢唯男（昭和42年卒）

ネパール

今カトマンズの宿舎でこの文章を書いています。初めてネパールに来たのが1991年の12月末で、今年でもう22年目になろうとしています。毎年トレッキングを楽しむようになって、いまではネパールへのアウトソーシングビジネスに取り組んでいます。都市ガスの配管や床暖房の設計図面をネパールで描かせて、日本の顧客に収めるもので、インターネット上での受発注システムを作り、これを顧客と現地で使用してもらっています。

東京と熊本そしてカトマンズ間で、上記のツールやスカイプなどでやり取りをし、時にネパールに行ったり、技術研修などに来日させて業務をすすめています。

最初は招聘したメンバーのビザを現地の日本大使館が発行してくれない。実績もなく設立したばかりの会社では実態がないに等しいということでした。友人・知人の応援でこれらを乗り越えて開業したのですが、2001年ディペンドラ国王一家の虐殺事件が起こり、弟のギャネンドラ殿下が国王になると、彼自身が起こした“キングスク！”（2005年2月）では、すべての通信手段を遮断され、ネットワークが命の私たちのビジネスは全くもって行き詰ってしまいました。遮断は10日ほどで終わりましたが、途上国にはカントリーリスクがあるとして、軌道にのせるにはしばらく時間がかかりました。

ネパール人は日本と日本人が大好きです。顔かたちが自分たちとよく似た日本人の国は経済も発展した先進国で彼らのあこがれの国です。70年代、80年代を通じて最大の援助国だったということもあるかもしれません。

また、中世の趣ののこるカトマンズを中心に、固有の建築様式や繊細かつ微細なタンカ絵（曼荼羅）などの伝統文化が残っており、それらの技能が細かい配慮を求める日本からの設計図面品質要求を充分に受け止めうる素地としてありました。

しかし、マオイストとの内戦の時代（1996年から2006年までの11年間）、カトマンズの街角には土嚢が積まれ国軍の兵士が銃座を構えてこちらを見据えていたり、夜9時を過ぎれば、隊列を組んだ武装兵士たちが街中を哨戒し誰何してきたりするのは、何ともおぞましいものでした。ちょうどその時期に会社を設立して業務を開始していたのです。

このころは、ツアーで来る日本人は皆無になり、NGOやNPOの活動も大きく制約されたり中止したりしていました。私たちの事業は貧困なネパールの医療や教育といった直接の援助ではありません。援助は時として一方的で依存体質を作ってしまうのですが、ビジネスは対等で自立した関係を作り出します。私のネパールの職場は半数以上が女性です。女性たちは大学は出ても仕事がないことのほうが多いのです。生き生きと働く彼女らとともに仕事を作っていくことは実に愉快でやりがいのあるものです。

ネパールの会社の人と（左端が筆者）

「ルクセンブルク滞在記」

森山由紀子（昭和42年卒）

ルクセンブルク

ルクセンブルク大公国は国土2586平方キロで熊本県の約1／3、人口51万人で熊本市の約2／3という小さな国です。その小さな国が昨年末の新聞に二度記載されているのをみつけました。

一つは、“グローバル人材の育成において日本の出遅れが目立つ”という記事中で、日本はマネジメント層の国際経験において世界54位、企業ニーズに合致した語学力で同58位、学生の海外留学で同47位。その各々でルクセンブルクは3位、2位、1位をしめていました。

もう一つは、“日本が一人当たりGDPドル換算額世界14位に上昇”という記事中、ルクセンブルクは一貫して首位の座を守り続ける、と載っていました。

世界唯一の大公国で一千年以上の歴史を持つ古い国であり、欧州の金融センターでありメディア産業に力を入れる新しい面を持つ国でもあります。

そのルクセンブルクに、1977年4月から1980年11月まで暮らしました。1970年代は鉄鋼業中心だったルクセンブルクがオイル・ショック以来、金融業に舵をきった頃です。日本企業はほとんど銀行と証券会社でした。ルクセンブルク在住の日本人は家族を含めて皆顔見知りという程の人数でした。現在は479人だそうです（2011年10月）。

ルクセンブルクの家の中で（左端が筆者）

首都ルクセンブルク市に住んでいましたが、豊かで、のんびりしていて、人々は親切でした。同じアパルトマンに住む、よく顔を合わせ挨拶していたおばあさんが「ちょっと遊びに来ない？」と家に招待してくれましたし、娘が誕生した時は同じ階の方も共に喜んでくれて、お祝いまでいただきました。e・l・c

娘が生まれた時は、熊本から両親が手伝いに来てくれましたが、母は着物姿で街の人々の注目を浴び、父は毎朝、嬉しそうに「ボンジュール」「メルシー」「オーヴァー」の3つのフランス語を使ってパン屋さんにパンを買いに行き国際親善をやってくれました。

ルクセンブルクの公用語はルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語です。病院に行った時、診療室に入ると、ドクターは「ボンジュール」と握手して、次に「貴女と何語で話しましょうか？」と会話の使用言語を尋ねました。患者に、使う言語を合わせてくれたのです（選択肢に日本語も入れてほしかった）。このようにルクセンブルクの国民は母国語の他にフランス語とドイツ語を使い分けて、流暢に話すことができます。そして多くの人が英語も。それは徹底した語学教育が行われているからです。小学校1年生から毎日ドイツ語の授業があり、2年生からフランス語、リセ（中学・高校）になると英語を叩き込まれて、外国語が堪能なルクセンブルク人ができあがるのです。

私も必要にせまられて、フランス語のレッスンを受けましたが、その中に、素晴らしい魅力的なものがありました。教師は舞台俳優、コンセルヴァトワールの天井の高い広い教室、授業はジャック・プレヴェールの詩の朗読、生徒は私一人。贅沢な授業でしたが、残念なことに、数回で終わりになりました。香港へ転勤が決まりルクセンブルクを離れることになりました。Aurevoir Luxembourg.

チェアマンを務めた『電気学会世界会議』

池田久利（昭和42年卒）

ジュネーブ

IEC（International Electro-technical Commission）中央事務局はスイスのジュネーブにあります。その建物は、美しいレマン湖畔で、国連（UN）や世界貿易機構（WTO）などの国際機関が集まっているところにあります。ビルそのものは、雑居ビルと同じような、何の変哲もないビルです。

ジュネーブに初めて行ったのは1999年の6月でした。私はその年からIECの諮問会議であるSB1（Sector Board I）の日本委員となったので、そこで開催されるSB1会議に出席するのが目的でした。現在、IECが発行する規格（Standard）だけが、電気に関する世界標準と認定されています。1990年代半ばにWTOのTBT（貿易の技術的障害に関する）協定により、世界の貿易は国際標準に準拠することが義務付けられ、電気機器はこのIEC規格に準拠することになっています。

SB1はSector Boardの名前の通り、分野会議の一つで、電力の輸送関係を担当します。現在大きな話題となっている次世代送電網スマー

中央が筆者(2008年パリにて)

トグリッドも電力輸送の一つです。世界15か国の代表で構成されるIECの理事会(SMB)に、市場の要求を勧告することがSB1の機能です。

電力の輸送分野では、設備投資需要の大きいアジアへの関心が高くなっています。中国の発電電力能力はすでに日本の約4倍に達しようとしています。電力の輸送分野でも巨大な建設が進められていますが、中国では2009年1月に世界で初めて110万ボルトの送電が商用運転を開始しました。日本はこのプロジェクトに大きく貢献しました。日本の技術力はこの分野で欧州と世界No1を争っています。国際規格を主導する欧米先進国もアジアを無視できない状況になっています。

このような背景で、私は2004年からSB1の議長を拝命しました。産学官の連携で日本の技術を国際標準とし、世界市場での競争力を高める活動にかかわっています。そのおかげで、2007年7月北京、2008年4月ニューカッスル(英)、2009年2月ニューデリー(インド)、同年9月ストックホルム(スウェーデン)、2010年5月沖縄と、いろいろな観光地を訪ねることができました。

国際間の政治的力学もあって、SB1は2011年6月に解散することになりました。日本関係者の努力で、同時に別の諮問委員会(ACTAD)として活動することになりました。私はACTADの初代議長として立ち上げに注力しています。2012年は、ACTADの会議を、4月にシンガポール、11月にジュネーブで開催する予定です。

昨年から大きな議論となっているTPPは、このWTOを中心とした貿易協定とどのように両立していくのか不透明なところがありますが、グローバル化も紆余曲折を経て進展していくと思います。日本が貿易立国を基本とするかぎり、今後、国際機関で働く人材の育成がますます重要になっていくと思います。豊かな感性を持ち自由奔放な濟々多士が活躍できる舞台が待っています。後輩多士の奮闘を祈念します。

「ハワイ支部便り」

澤田興洋(昭和41年卒)

ハワイ

今までの連絡事務所から2011年の熊本大同窓会にて、ハワイ濟々黌同窓会支部を正式に発表させていただいてまだ半年ですが、これからどのような形で発展させるのか暗中模索の状態です。今後、東京同窓会にも参加させていただき、事務局の方にもお会いして、活動状況など勉強させてもらえればと思ってます。

現在のハワイ同窓会メンバーは7名(内2名学生)です。今後、増えるのかとの不安もありますが、何とか頑張っていこうと思っております。

私事ですが40年以上前に来た時、どなたか濟々黌の先輩がいらっしゃるのではと思い、熊本県人会などにも問い合わせたりしました。しかしながら、見つけることができずに長い間寂しい思いをしました。だけど憧れのハワイの地の利のせいか、諸先輩・後輩が沢山遊びに来られ、一緒に遊んだり、食事したりの機会に恵まれました。

思い出になりますが、広島カープの優勝記念ハワイ旅行の木葉先輩に、ひそかにフルーツバスケットを差し入れたりしました。後でご丁寧な返事をいただき感動しました。

濟々黌110周年では、飛行機をチャーターして大勢の同窓生の方々が来られました。事前に大田黒君が来て打ち合わせなどやりましたが、思い出すのは諸先輩のハチャメチャの行動っぷりです。やはりこうゆうのが『濟々黌』だと思います。

濟々黌バスケット部もハワイ旅行で2回来ていただき、まさに濟々黌出身らしいことを皆でやって帰りました。今でも熊本に帰り、部の先輩／後輩と食事しますが、話の種に当時のことが話題に上ります。

今後の活動として、特に東京同窓会の方々にご協力をお願いしたいことがあります。

ハワイ同窓会支部を作るきっかけは熊本の

ハワイ支部メンバー集合写真

後輩に紹介されて、現在、事務局をやってるH・4卒の満永君が来てくれ、加えてハワイ在住の知人より濟々黌を出た人が居るとの情報をもらい、連絡したらS・59卒の林田君が見つかりました。他のメンバーは、熊本の同窓会事務局から会報を送ってる人がハワイにも居るとの情報で見つかった次第です。ロサンジェルスの同窓会支部も、林田君が同級生が居るとの事で、私がロスに行くチャンスがあり、その時偶然に私の知り合いから「お前の学校の後輩が居る」との情報を得て、早速訪ねて、3名で食事会を開き、その席でS・59卒の河上君にロス同窓会支部をお願いした経緯があります。この同窓会支部の輪を、これからもニューヨーク他、各所に広げられたらと考えております。とにかく各所に住んでる方の情報がなければ、どうにもならないのが現状です。

私の考えでは、東京同窓会の方なら一番海外の情報があるのではと思います。アメリカ以外、特に南米などには、かなりの数の同窓生が行かれてると思いますが、ハワイでは情報が取れません。同窓会会報にでも載せていただくようお願いします。ヨーロッパなどにも同窓会支部ができたら(行くチャンスは限りなく少ないですが…)、旅行の際、皆さんと食事会でもと思っております(ハワイスタイル?)。

熊本の事務局にお願いしたことは、今後も日本国内の同窓会支部の輪も拡大・充実させてもらいたい、ということ。

先日、支部集会の折、会報を見ながら「東北・北海道地域に同窓会支部がないのは寂しいですね」と話していたところでした。仙台とか札幌ですと、どなたかいらっしゃるような気がしますが…このような形で各所に同窓会か連絡事務所など作れるのが『濟々黌』だと思います。

私の妻・3人の子供、それに友人たちが「お前の学校は変わってる！異常！」だと言いますが、それでも最後には、いい諸先輩・後輩を見て、この年でこれだけ密に付き合えるのがうらやましい、と言ってくれます。(特に、初対面なのに、食事したりするのが不思議なようです)これは、いくら説明しても私の妻以外の方は理解してくれません。

娘は熊本に連れて行ったときに、濟々黌が見たいと一緒に母校に行きました。歴史がある学校だね、との評価でした。長い歴史があり、タテ・ヨコの繋がりがあり、世界中で同窓生が活躍しているような高校は、全国的にもなかなか少ないように思います。

これからも各地で同窓会支部・連絡所が発足し、相互に活発な交流ができて、同窓会だけの交わりに限らず、いろんなカタチでお互いにとって、楽しく・有意義な世界的ネットワークができることを切に願います。

これからも　いろいろの方がきて頂けるハワイで頑張っていくつもりです。何かの時にはハワイ濟々黌同窓会があることを思い出していただければ幸いです

「シリコンバレーとスティーブン・ジョブズ」

本嶋公民(昭和42年卒)

シリコンバレー

シリコンバレーは文字通り半導体(シリコンで出来ている)関連企業が集積した谷である。金門橋で有名なサンフランシスコ湾は南に広がり、その一番奥にあるサンホセ空港に着陸する飛行機から眺めると、そこが谷になっているのが良く分かる。

一帯は、地形も変化に富み自然も豊か、気候が良く土地も肥沃で、今も昔も生活するのに最高のところである。年間を通じて殆ど快晴(冬に少し雨が降る)、夏は暑いが日陰は涼しく、冬でも昼間は半袖でゴルフができる。北にはサン

フランシスコやワインで有名なナパバレー、東にはヨセミテ国立公園やスキーリゾートが点在、南にはゴルフで有名なペブルビーチやクリント・イーストウッドが長く市長をやったカーメルがある。

また、シリコンバレー北東のサクラメント近くで1848年に金が発見され全米から野心ある人々が殺到し(ゴールドラッシュ)、アジアからの移民やメキシコ出身者も多く人種のルツボである。世界中から人が集まり違和感無く活躍できるところでもある。半導体を意味するICはIndianとChineseといわれたくらいだ(現に半導体産業はインド人と中国人が支えている)。

このように、シリコンバレーには、誰もが住みたいと思う自然、人種的な多様性と自由な価値観があり、スタンフォード大学などから供給される人材に加え、世界中から優秀でやる気のある人間が集まって来た。その結果、半導体ばかりでなくアップルなどコンピュータ関連、YahooやGoogleなどネット関連、最近ではトヨタと提携した電気自動車のテスラーなど、新しい企業と産業が途切れることなく生まれて成長している。

ここで、先日亡くなったスティーブン・ジョブズとアップルの例でシリコンバレーを紹介したい。

ジョブズは高校生のときシリコンバレーの代表的企業HP(ヒューレット・パッカード)でアルバイトをしていて、天才エンジニアのステーブ・ウォズニアックと運命的な出会いをする。ジョブズは大学ドロップアウト後、アタリで働いている時に、ウォズニアックとAppleIというパソコンを開発し売り出す。翌1977年にはウォズニアック他とアップル(Apple Computer)を創業する。その後、MacintoshでDesk Top Publishingというコンセプトを実用化しデザインや印刷業界に革命を起こす。そして、会社は順調に成長したが、自分がPepsi Colaから連れてきたジョーン・スカリーに会社を追われる。

ジョブズは理想のコンピュータ作りを目指して、1985年にNeXT Computerを創業するが事業としては失敗に終わる。しかし、技術的に行き詰まったアップルが1997年にNeXTを買収し、ジョブズはアップルに復帰する。その後はiMac、2000年に音楽産業に革命を起こしたiTunesとiPod、2007年にはiPhoneを大ヒットさせ、アップルを時価総額全米一の会社にした。

残念ながら、ジョブズは2011年10月ガンのため56才で亡くなった。彼が亡くなり、世の中を変える彼の商品がもはや出なくなったことを寂しく感じるのは筆者だけではないだろう。

一方、ジョブズは個人的にもビジネス的にも日本に強く繋がっていた。個人的には禅に強く傾倒し、日本文化が大好きだったと言われる。彼の細部に拘ったシンプルなデザインは禅と共鳴するところがあったと思われる。ビジネスの面でも、日本企業を頻繁に回って新しい技術をいち早く見つけて採用し、数々の画期的な商品を出した。筆者は、ジョブズがNeXTを作った直後、成田に向かう飛行機の中で偶然にも彼と話をする機会があり、「お前の会社の工場を見たい」と頼まれて工場に案内したことがある。彼は日本企業の工場(=技術)には並々ならぬ関心があり、多くの新技術を提供したソニーとキャノンは彼の尊敬する数少ない会社であったと言われる。

このようにジョブズと日本企業との係わりは大変深く、ある意味で日本企業が彼の成功の一翼を担っていたと言える。アップル以外のシリコンバレー企業の重要なパートナーである日本企業はたくさんある。今後グローバル化が進む日本企業には、もっと持ち味を発揮して上手く立ち回ってもらいたい。

「頑張ろう!!日本企業」

シリコンバレーエリアと代表的企業

「ロス・アンゼルス支部便り」

河上慎二郎(昭和59年卒)
ロス・アンゼルス

私は、アメリカに在住しておりますS59年卒の河上慎二郎と申します。

済々黌時代は野球部に所属し、学校の駐輪場裏の道を挟んだ所にあった野球部寮で部員の仲間と一緒に生活し、皆様もそうであったかと思いますが、私もまた密度の濃い充実した済々黌生活を送らせて頂きました。

済々黌での毎日は、野球部歴代の先輩方からの教えにより(1)4時間目の授業中に教科書に隠れて弁当を食べ、(2)昼休みの時間はグランドで練習(1年生時代は、グランド整備)、(3)放課後は、夜遅くまで白球を追い、(4)寮に戻ると夜中10時より再度召集され、手の平のマメが何度も潰れてしまう程の素振りの時間…。こんな生活をしていた為か?(いや、周りには優秀な野球部員も沢山いましたので、それが理由では無さそうですが…)どういった訳か、私は、英語・数学をはじめとするお勉強がとても苦手でした。しかしながら、机の上での勉学に対する消極的な態度とは相反し、それ以外の部分ではとても活発な高校生だったように思えます。

高校3年生になり卒業後の進路としてアメリカ留学を決断した時、私の事を入学以来よく知っておられた中村恭子先生からは、「あなたが?何しにいくの???」と、さらっと告げられた時の事を、時折懐かしく思い浮かべます。

秋のビックベアー・レイク。2010年秋、家族写真

あれから28年。アメリカの公認会計士でもある私は、現在、基礎化粧品開発販売会社ビバリーグレン・ラボラトリーズ(Beverly Glen Laboratories)の財務部長として勤務し、ロス・アンゼルス近郊のアーバイン市で、妻と3人の子供達、それに一匹の犬と一緒に暮らしています。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、そんな私のカリフォルニア生活を、簡単ではありますが、皆様へご紹介させて頂きます。

アーバイン市は、ロス・アンゼルスから南へ車で40分くらい走ったオレンジ郡(OC=Orange County)の中に位置します。日本に比べると犯罪が多いアメリカにありながら、アーバイン市の犯罪率は0.4%(全米3.8%)と低く、新しいショッピングセンターもあり、美しい街並みが続いております。しかしながら何よりも、一年中温暖な気候に恵まれ、いつでも青い空とパーム・ツリーを拝む事ができるという点が、一番の魅力ではないでしょうか。

また、ロス・アンゼルス近郊のビジネス拠点として、世界中から多くの企業が進出しており、日本企業の駐在員として来られている方々も、この地域には多く生活されております。

こんなカリフォルニアの生活とよく似合うのが、青空の下でのBBQ(バーベキュー)です。アメリカ人はBBQが大好きです。普段の週末でも、家でコンロを使うような感覚でBBQグリルに火を熾し、手軽に肉や野菜を料理します。また、特に7月4日の独立記念日(Independence Day)や9月3日の勤労感謝の日(Labor Day)などの祭日、アメリカン・フットボールの決勝戦"スーパーボール"が開催されるような特別な週末には、決まって友人や家族が集いBBQで仲間と一緒に楽しみます。もちろん、私もBBQは大好きです!

さて、こんな青空のもと、自宅から車を約1時間40分ばかり内陸方面へ走ると、標高2000m級の山々が連なるビック・ベアー山麓の大自然に遭遇する事ができます。

そこには、一年中温暖なカリフォルニアでは、なかなか体験する事ができない四季があります。秋になると紅葉が見られ、11月くらいからは厳しく冷え込み、湖の表面が凍るほどの本格的な冬もやって来ます。ロス・アンゼルスやオレンジ郡の近郊にありながら、三つのスキー場が隣接するスキー・リゾートがあり、ウィンター・スポーツを楽しむことも出来ます。私達家族も、3年ほど前に別荘を購入し、日本ではなかなか体験できなかった山の中の生活を楽しんでおります。

こんなカリフォルニアの生活も、アメリカ全体の規模で考えると、ほんの一部でしかありません。この広大な国には、それぞれの地域文化から生まれたおもしろい顔が、まだまだ

たくさん存在しており、そういった地域でも数多くの同窓生の皆さんが活躍されている事だと思います。

昨年、モンタナ州在住S61年卒ラグビー部OB・森崎祐史くんとニューヨーク在住H14年卒陸上部OB・藤原歩(あゆみ)さんと一緒に、ソーシャル・ネットワーク・フェイスブック(Facebook)で"Seiseiko USA"を立ち上げ、全米にいる同窓生による共通のコミュニケーションの場として募り始めました。現在17名の同窓生が集っており、今年に入ってからは、名簿作りも進めております。近い将来、そういった世代・地域を越えたアメリカ在住の仲間達と、実際にお会いできる日がくる事を、今から皆で楽しみにしております。

「国際援助」を通して視た世界

藤田廣己(昭和42年卒)

発展途上国

母黌卒業後一年遅れで同じ竜田山麓の学部にデモシカ進学したので青春時代といっても変わり映えしない日々だった。高校3年間ラグビーで苦楽を共にした桐原健一君とはまた一緒になり汗まみれ泥まみれで楕円のボールを追っかける毎日だった。

昭和47(1972)年学部卒業とともに外務省関係の団体(OTCAのちにJICA)にデモシカ就職し、途上国地域への政府開発援助(ODA)のうち技術協力部門に長年携わって先年に60歳定年を迎えたが、熊本育ちの身にとって海外関係の仕事は異文化ショックで当惑するやら驚くことが多かった。

ラグビー部時代の仲間と(後列右端が筆者)

他方で仕事を始めて不条理に感じたことがある。つまり援助の目的が途上国が開発された状態に至ることにあるならば、仕事に精励することは自分が要らない状態を目指すことになる。したがって逆説的であるが援助事業あるいは援助機関が存続するためには途上国の貧困や低開発状態は続いてもらわなければ困るという皮肉が生じる。本朝では敵に塩を送った戦国武将の逸話は美談と受け止められがちだが、それは単純な反応にすぎる。敵将の部下を籠絡して謀反させるという意図でもなければ普通はそんなことはしないだろう。

伝統的国家観や国際政治の感覚からみれば援助とは他国への干渉行動の一類型である。そもそも自分のてがね(手金)で、ひと(他国)の殖産興業ひいては富国強兵を助けるなど、自身(自国)の首を絞めることに繋がりやしないか?

そんなお人好し(国家・政府)がどこにあるだろう?それを推進する政治家や政府とは国家や自国民に対しむしろ不実であり背徳ではないのか?したがって他者のために援助するとは偽善であり畢竟我が為に行なうものであるはず…といった命題というか疑問を懐いたものである。

現実には、世界大戦の惨禍を経験した国際社会で対外援助は肯定的に受け止められ、多彩な理念提唱?中にはキレイごとのご託宣や称揚?もあって前世紀半ばに族生したのち同世紀末までに国際社会で「公共善」と認識される一大潮流に至ったのはご存知のとおりである(思えば小生が関与した約40年の歳月は、援助現象がマイナーからメジャーに展開変遷する歴史とほぼ重なっており、定年退職の折にも昔日の感を懐いたものである)。一方、職場の周りで、ないし援助の世界では理想主義的見解が大勢を占めており、前述した疑問命題のようなことを唱える者に出会うことは少なかった。むしろ危険思想だったのかタブー視する雰囲気さえ感じたものである。当人は屈

託なく思慮していたのだが…。

明快な納得がないまま定年卒業してしまったが数年たってなんとなく見えてきた。正確には様々な側面ごとに評価されるべきだが、総じて大雑把に表現すれば、援助する政治的スタンスは、国益追求的であるがそこそこに理想追求的/理念迎合(使命認識)的でもあり、援助効果の還元(見返り)は一部回収/一部未回収/一部回収不能の三態があり、援助は途上国発展に一部奏功/一部弊害/一部中立的(関連性希薄)の混淆…などといったところではなかろうか。"想定外"を"確立論外"と解するのが"科学的"と錯覚されたように、世の中はそこそこに合理的であるが同時に非論理的であることと符合するような印象である。

ひるがえって、そういう仕事に携わったわが人生を振り返れば、一部辛苦/一部不本意/一部不完全燃焼といったところか。思い出せば母黌在学時の学業成績と似たり寄ったりだが致し方ない。ところで、誰しも死ぬ瞬間までは現役人間であり余生という人生も無い。であるから定年は越えたものの今は新たな現役の新一年生。今度こそこれまでの経験蓄積と習得知見をヨスガに、人さまや若人への余計な援助お節介は慎んで、他者に迷惑掛けず自立自尊して己れの日々を全うすべく暮らしたいものである。

学年便り

広がった世界を自由に!

西山ありさ(平成22年卒)

西山ありさ

今回多士東京の記事執筆をお受けし、キャッチコピーが「世界に羽ばたけ済々多士」と拝聴致しました。周りには、日本のため、世界のため活躍されている諸先輩がおられ、自分自身「世界」というものを漠然としか考えていないことに気づかされました。私は、大学生になり、はや2年になろうとしています。上京して気づきましたが、高校では、勉強に部活の繰り返しで気づけなかった、様々な「世界」が広がりました。

まず、その一つとして、私は、幼少のときから書道をしています。いまや有名となったFACE BOOKに作品の写真を投稿することや展覧会に出品することにより、足を運んでくださる方がおられ、様々なコメントを頂いています。このような事により、自分の作品を客観的に見ることができるようになりました。一番印象に残ったことは、外国の方から、褒めて頂いたことです。そこで、作品を通して世界にも通じる感性というものがあるのだと気づかされました。自分の感情、価値観を文字にして表せる書道の楽しさを、今度は離れていても一緒に書道を習っている小さな妹にも伝えていきたいなと思います。

そして、中学のときから現在まで、ソフトテニスを継続しています。高校では、暑い中、寒い中、受験まではソフトテニス一色の日々でした。朝暗いうちから家を出て、深夜に帰るという日々で、勉強が追いつかなかったりしましたが、仲間と一緒に汗を流し頑張りました。大学進学後も辞めることができず、大切な仲間と好きなスポーツに集中できる「世界」があることに感謝しています。

また私は、アルバイトを某テレビ局でしています。今ここで働くことができているのも、受験の際、マスコミで働きたいという希望を後押ししてくださった済々黌の先生方・友達、家族のお陰です。メディア関係の業界は自分が望んで将来働きたいという業界で、生活が不規則になりがちですが、「希望する世界」の醍醐味を肌で感じ働けることに感謝しています。

このように、私の周りには、さまざまな「世界」が広がっている最中です。長く継続してきた書道に、ソフトテニスに、テレビ局のアルバイトに、これらの「世界」を生かすも殺すも、自分のこれから送る学生生活が重要なものになると考えています。これからの日々に「なぜ?」「どうして?」という問題意識を持って、済々黌の諸先輩方、友人から自ら積極的、主体的に学び、世界を広げていきたいと思います。

それは遠い「我が家」

今村　玲（昭和62年卒）

今村　玲

人には様々な人生の分岐点がある。自分にとって今から28年前の桜の花が薫る4月のある日、入学の為、濟々黌の黌門をくぐったことは明らかにその一つに数えられる出来事である。親の期待も空しく、入学してから学業については全く振るわなかったが、その後の自分の人生に多大な影響を与えてくれた多くの人々に出会い、中学までに自ら培ってきたものよりさらに幅広い価値観に触れ、その結果として自分の心の奥底に眠っていた精神的な「自由」とでもいったものを獲得した過程ともいうべき3年間であった。その中でもひょんなことから応援団に所属し、一学年上の強面で厳しいS先輩のもと、夏の暑い中での野球部の応援、学園祭での演武会の前練習等、あの頃の若い情熱で毎日を過ごしたことは自分にとって特に心に残る懐かしい思い出である。中学から上がったばかりの15歳の私にとっては、その時の応援団OBも含めた先輩方との触れ合いで学んだことが、自分にとって、その後の人生で様々な物事を決める際の価値判断基準に大きな影響を及ぼしていることは確かな事実である。「○○先輩だったらこういった場合どうされるだろうか？」　そういった自分自身への問いかけでその答えを見つけ、いろいろな場面を乗り越えてきた。

3年生の時に担任していただいた大庭先生との出会いも忘れられない一つの思い出である。どちらかといえば自分の経験した中学校までの型通りの先生像とは大きく外れるような先生であり、教師としての専門の数学と同じかあるいはより熱心にご専門の「UFO」と「きのこ」について、先生のユニークなご自説を授業時間に展開される姿は今でも心に浮かぶ光景である。

私にとっての濟々黌は「遠く離れたわが家」のようなものである。あれから25年ほどの月日が流れ、現在の私の生活には濟々黌の友人や先輩方と頻繁に会うといった機会もなく、「濟々黌」は現在の自分の日常に密着したものではない。しかしながら、卒業して25年、全く会っていないような先輩、同輩、後輩と久しぶり会う機会をもつと、ほんの数秒だけでその長い月日を一瞬にして乗り越え、毎日会っているかのような親密な風がそこに流れてしまうのは「濟々黌」というものがもつパワーなのだろうか？　そこは自分の原点であり、その後自分がどのように生きてきたのか、それに間違いはなかったかどうか、それらの事を確認する場所であり、いつでも身近で暖かい人達が暖炉に薪をくべながら待っている場所である。

再会

藤澤伸介（昭和52年卒）

去年11月、僕は銀座で14回目の彫刻の個展を開きました。その会期中、驚いたことに濟々黌の同級生が7人も訪ねてきました。

僕の作品や個展の様子を実際見て知っている人は同級生では数人しかいませんが、同期に案内状をほとんど出さないのは彫刻なんて興味無いだろうと思っていたからです。

藤澤伸介　作品をバックに

今回来廊の7人のうち特筆すべきは、5人が何と卒業以来35年ぶりの再会で、その顔ぶれが実に不思議なものだったことです。

元・同じクラスが2人、残り3人は他のクラス、皆に共通している事は、在学中僕と親交が全然無かったということです。クラスメートのHさんは学年屈指の才媛で、おいそれと話しかけられる雰囲気ではなかったし、ホルンを吹いていたMさんとも話をした記憶がありません。他のクラスだったO君、N君、K君、顔と名前を知ってはいても何の接点も無い、未知の、無に等しい存在でした。

そういう人達が何故5年も経って、僕の個展に現れたのでしょうか。「？」で頭が一杯。

しかし不思議だったのは在学当時交流も無く、卒業と同時にそれっきりの縁だったはずなのに永い年月を経て会ってみたら、「旧交を温める」という表現がピッタリの気持ちの高まりと懐かしさがお互いに湧き上がってきたことでした。昔から変わらぬ友情があったかのような錯覚を抱かせるぐらいに親密な時間をみんなと持てたのは一体どうしてなんだろう。セイセイコウは遠く蜃気楼のようになりかかっていた折、今回の再会で、今の年齢と経験を持ったまま一気にリアルな高校時代に戻ったような気がしました。クラスの垣根も当時のつきあいの有無も飛び越えて、ただただ“懐かしい”幸福な時間。どうもみんなも、僕と同じような感慨を持ったようでした。

O君が教えてくれたのですが、今回の僕の個展の情報は、地元熊本日日新聞に載った顔写真入りの個展記事をたまたま見つけたSさん（中1の時だけ同じクラス）が、たまたまS'さん（高3の時同じクラス）に知らせ、そのS'さんがたまたま同期へ一斉メールを送ったという流れを経て皆へ伝わったらしいのです。起点となったSさん（後日彼女から「新聞を見て、旧友に出会ったようでとても嬉しかった」とお便りを頂いた）にしても、バトンを受けたS'さんにしても、当時僕とは全く無縁だった人で、そうした人達が親しみを持って今の僕を見出してくれたことに感動した。

同じ時代に、同じ校舎で、同じ空気を吸い、それぞれに悩みながら懸命に青春を送った日々は共通体験として結晶化し、胸の奥深くに残ったのでしょう。だから同期というだけで、35年経っても結晶同士が反応して無条件の懐かしさと友情（!?）が湧いたのだと思います。

幻のようになりつつあったセイセイコウが同級生との再会で鮮やかな色彩を伴った“濟々黌”として胸に甦りました。想い出の母黌の黄線が少し光ったように見えたのでした。

「七夕会」事始め

佐々博雄（昭和42年卒）

我々昭和42年卒業生は、団塊の世代である。成績の良かった者も悪かった者にとっても当時の東京は、あこがれの都会であった。熊本弁の混じった変な東京言葉を自慢げに使う者もいた。多くの同級生が東京の大学を受験した時代である。一方東京での学生生活の現実は、学生運動の風が吹き荒れる中、三畳一間の安アパートで腹をすかして、親の仕送りを待つような暮らしであった。アルバイトも限られており、家庭教師やビルの管理人などは、魅力のアルバイトであった。

「七夕会」の総会（東京・銀座）

西新宿の住込みビル管理人をしている同級生宅は、土曜日ごとに終電に乗り遅れた者や、マージャン目的の42年同級生の溜まり場になっていた。大学卒業後は、それぞれ就職先の関係でバラバラになり、東京に残った少数の同級生が時折集まっていたが、組織だったものではなかった。

その後、同級生の生活も落ち着き、済済黌の夏の甲子園出場や同級生の受賞祝いなどをきっかけに集まることが多くなり、西新宿の管理人ビルによく来ていた福田修一君（平成19年没）が『週刊就職情報』の「あつまれ同級生」という取材企画を持ち込み、出席すれば、渋谷の「ふぐ富」で「フグが食べられるぞ！」ということで、福田君、外園勉君（現在神戸在住）ら9名が集まった（話の内容は『週刊就職情報』昭和56年4月17日号参照）。

この会合をきっかけに福田君と外園君を中心に東京在住の同級生に声をかけて、毎年七月七日の七夕に一番近い土曜日に、飲んで語りあう会を設けることにした。昭和五十六年七月四日（土）、両国の外園君宅で第一回の「東京七夕会」が開かれ、済済黌東京同窓会にも参加することとなった。当時の名簿の裏には、済

済黌三綱領が印刷され、その下に「七夕会ステートメント」という文章が載っている。その文章全文を紹介すると、「藤肥州の領せし地の同窓に学び、この東京で再び出会った同志は、毎年七月七日に一番近い土曜日に、飲んで語り合うこととした。清明、仁愛、剛健の済済黌百年の伝統と、何ともいえない面白さは、我々共通のバックボーンであり誇りである。空に天の川のある限り七夕会は不滅であり、我々の友情は不変である。Let's cross the Milky Way」というものであった。このステートメントにあるように、毎年、42年卒同級生は楽しく面白く「東京七夕会」を続けている。

今年の7月7日で「東京七夕会」は32回目を迎えることになる。この会の楽しさは、毎年、30名前後の出席者の中に、新しいメンバーや数十年ぶりの参加者があることである。高校時代とほとんど変わらない顔、容貌が変わってしまい名前は覚えていても昔の顔が思い出せない顔など様々である。同級生もこれからは、高齢化が進んでいくが、七夕会はいつまでも我々同級生が参加できる不滅の「集いの場」としての存在であってほしい。なお、現在、七夕会会員数は、首都圏在住者約100名程である。

天の川を共に渡りましょう！

「台湾旅行記」

益田修治（昭和40年卒）

我々40年会は有志を募り3年前から海外旅行に出かけている。愛煙家が多く禁煙時間が短い東南アジアが中心となっている。

1回目はタイで参加者12名（東京1名）、2回目はベトナム16名（同7名）、3回目が台湾23名（同10名）と好評で年々、参加者が増えてきている。

今回は高雄、台北に2泊ずつで、ゴルフを3回プレーの予定となっていた。初日は信誼球場（＝カントリークラブ）でプレーしたが、雨と霧で残念ながらハーフで中止となったため市内観光に行くことになった。高雄は台北に次ぐ第2の都市で最大の港湾都市で水の都。最初に向かったのは、湖の中にたたずむ美しい左営・慈済宮竜虎の塔で、ハーフぶんの残りのパワーを使って皆で息を切らしながら上った。夜は雨の中を隅田川に似た愛河をクルーズ。

翌日は快晴、大崗山球場（＝カントリークラブ）でゴルフを大いに楽しんだ後、新幹線で台北へ移動。台北は20年ぶりに来たが、大都会でびっくりさせられた。人口は280万人を超えているという。

14日、一日観光をすることになっていた。雨の中をまず、蔣介石を記念して建てられたという中正記念堂を見学。そしてその後、世界屈指の博物館、故宮博物館に行き69万点もあるという歴史的美術品の一部を堪能し、有名な白菜、豚の角煮などの工芸品を見て皆感動していた。今回の最後の夜は屋台で有名な士林夜市を見学した後、地下鉄に乗り地元の人が行く居酒屋風麺屋で夕食を大変美味しく戴き盛り上がった。

最終日のゴルフ場は長庚倶楽部だったが、綺麗なコースだと思うがまた、霧でほとんど見えず残念！　スコアもいまいちだった。

ゴルフ場で最後の晩餐を楽しみ、3時間あまりのフライトで成田に無事帰ってきた。熊本、東京ぐるみでの和気藹々と大変楽しい旅行となった。3年間だけの高校時代の同級生がこのように多く集まって旅行するなどは、他校にはないのではと自慢に思う。大事にしたい。来年も是非参加したい。

「会則」で運営する37年会

大谷和守（昭和37年卒）

大谷和守

私は、前に東京同窓会の学年幹事を務め、その後「多士東京37号」の編集にも縁があった。この度、初めて学年便り投稿の機会を得たので、これまでの概要と現状を紹介する。

私達37卒は三十代のころから、話題がたまって気が向けば懇親会やゴルフコンペ等、同期を中心にした不定期のイベントを企画しては、都度集合をかける世話人がいて、同期の絆だけは劣らず繋いできた。四十代においても恩師の上京に合わせた懇親会開催など同様であったが、仕事に追われる世代ともなり、同期の枠を越えた東京同窓会となると今一関心が低かったようである。そんな中、東京同窓会「総会・懇親会の幹事担当」年度だけは一大結集をし、その責任はなんとか果たし37卒の面目が保てた。しかし、それが過ぎると、また元の不定期のイベントの会に戻ってしまい、殊に五十代に入ってから東京同窓会への会費の支払いが毎年数人以下の事態が続いていた。これでは37卒は関東にいなくなったにも等しい。これではまずいんじゃないかと、今から十年程前に有志が集まり、会の在り方を見直すことにした。

この結果、新たに「東京37会」と称して会則を作り、その賛同者を会員として定例的、継続的な同期会の運営を図ることにした。以来、会員からの年会費徴収事務も定例化し、懸案だった東京同窓会への年会費納入の継続性などいくつか改善効果が見えてきた。現在の「東京37会」の特徴は

▽会の世話役（役員）を特定の個人に依存しないで、役員任期と交代基準を会則で定めている。

会長は東京同窓会の学年幹事を担当するので、会長交代期は二月末頃迄の東京同窓会事務局への交代届を怠らない様、特に注意している。

▽会の運営上の基本的なことを会則に掲げ、会運営の公平性、透明性を図っている。▽会には37卒の関東地区在住者約七十名の中、四割程度が参加している。▽会が主催する定例的行事は①真夏の暑気払い懇親会、②十二月の忘年会、③三月七日の総会・懇親会。▽会員の自由企画での不特定懇親会は①飲み会、②ゴルフ、③マージャン、④懇親旅行、⑤会食。

以上が東京37会の概況である。今後も会則が守れればこの状態が持続できるであろう。

ところで本誌のキャッチコピー「世界に羽ばたけ済々多士」にあるように、現役の方達には大いなる羽ばたきを期待したい。

羽ばたかなければ広がりは無い。母黌の名も然り。OBが各地に広く活躍しなければ所詮済々黌もローカルな存在に過ぎない。東京同窓会の隆盛こそ羽ばたきの一つの証でもあろう。人は永遠や全能を授ってはいない。一時であれしっかりと存在して、一端を支えることから活躍が始まる。そこには「人間到る所青山あり」の漢詩の強い響きが期待される。

卒後55年―32年会

宇野木弘一郎（昭和32年卒）

我々32年組も済々黌を卒業して、この春で55年を迎えました。

終戦の年には小学一年生で、その後の食糧難の時代を乗り越え、また日本復興時にはその一員として青年期を活動して来ましたが、現在では古希を過ぎていますが皆んな元気にシニア世代を楽しんでいます。

まず添付の写真ですが、これは昨年11月25日に東京・築地で開催しました忘年会の時の集合写真です。

前年から引き続き藤田八郎先生と名取昭五郎先生のお二人をお招きし、また熊本から同窓会の会長を務めています同期の井薫君と宗方良晃君も駆けつけて呉れ、賑やかなひとときを過ごしました。

この忘年会は毎年11月の最終の金曜日と決めて開催していますが、村上紘一君や藤村三治君の尽力で現役の時代から30年近く続けています。まさに継続は力です。

宇野木弘一郎

一方、毎年春から初夏の頃には伊豆高原へ出掛け、近藤伝二君のお世話で桜美林大学の研修センターを利用させていただきながら、泊り掛けのゴルフ会を催しています。

32年組のゴルフの実力は、第41号の小誌で紹介されていますが、東京同窓会の学年別対抗戦ではぶっち切りの優勝を果たす猛者連をも抱えていますが、どちらかと言えば前夜の飲み会の方が楽しみなメンバーもいて、それこそ和気藹々の懇親の場となっています。

さて今年は母黌の創立130周年と言うことで、この5月には記念の行事も開催されるようですが、毎年「3月2日」と決めています32年組の同窓会も、今年はこの日の前日に設定して開催することで、両方に出席出来るように企画されています。

32年会の忘年会（東京・築地）

往昔懐へば遠き哉
尾浦武昭（昭和29年卒）元東京同窓会副会長

表題は黌歌の一節より拝借したものである。我々の同期が憧れの黄線をつけて濟々黌の黌門をくぐったのは昭和26年4月のことであった。今を去る事61年も前のことになる。大変厳しい時代であったがその頃の苦しい想い出はあまり残ってはいない。

帰りに坂の下にあったモクさんの「うどん」を先生に見つからないように隠れて食べた事、上通りの「蜂楽饅頭」が最高の御馳走であった事など想い出は食べ物に偏っている。

よく殴る先生が多かった記憶はある。しかし先生に一度も殴られた事が無い同級生も何人も居る事からして、殴られた自分がきっと悪かったのであろう。親しい友人の一人が私に向かって、「お前が一ぺんも滑らんで付属中学、濟々黌、大学、有斐学舎とスーッと来たツが不思議でしょうがなか」などと失礼千万なことをいう。「バカンこつば言うな、俺が頭の良かったけんた」と言い返す。素よりそれほどの頭脳の持ち主でないことは当人が一番承知のことであるが、とにかく濟々黌は仲が良い。

昭和34年の頃であったか、同期の渡辺君が私の所へ「オイ、いっぺん29年の集まりば、せんや」と言ってきた。否も応もなく始まったのが濟々黌東京29会である。爾来50余年一度も欠けた事無く、新年会、総会を行い、10年程前に卒業50周年を迎える時に記念誌を発行した時の編集委員会が其の俤残り、毎月第一土曜日に「一土会」と称して昼食会を開催している。

私が東京同窓会の幹事長を拝命した時、幹事長と学年幹事のかけ持ちは大変だろうと、荒牧君が自発的に交代を申し出て務めてくれた。一昨年より分業制度になり、本部幹事会幹事は渡辺君、その他の取り仕切りは木原君、財務は私という事で、後期高齢者二年目の我々は頑張っています。

29年会の集合写真

藤田先生と金津先生の秘話
岩永忠（昭和28年卒）

12月11日(日)12時より表参道のNHK青山荘にて開催。昨年同様、藤田先生、29年の尾浦元副会長などご参加願い、大阪からも参加があり18名ほど。

席上、藤田先生の思い出話の中で、戦時中に藤田先生が将校で軍刀を下げ長崎に赴任した際、捧げ銃で出迎えた兵隊の中に金津先生が居られ、学校で「あーたが軍刀ばぞろびくごつして来なはったときに捧げ銃ばしとったですばい」と言われた由。ジープさんにかなしゃんが“捧げ銃”をした、という話にみんな「！！！」。

☆会員の異動／永眠・内海満寿男君　転居・坂田潔君

28年会の集合写真（東京・表参道）

人生八十年
沖村浩史（昭和27年卒）

昨年三月末をもって現役を退き、同時に東京同窓会の副会長も辞した。日頃昭和一桁は血管が弱いと言われてきたが、これは間違いだったようで元気な友人も多く、小学時代まで子供の病気のほとんどに罹ってきた者として間もなく傘寿に届くところまでやって来れたのは、多くの方々のご支援のお陰と感謝している。

昭和33年社会に出るにあたって、同期より二年も遅れてしまったと気落ちしたが、これは在校中草野球とラジオ作りに専念していた結果なので仕方がない。しかし定年がそれ以上長い所に行けば同じ事と気付いて、何とかこれまでやって来た。ところが先日、事業をやっている小学時代の友人から「普通のサラリーマンは、定年退職後数年で亡くなる者が急増しているのでボケないようにせよ」と注意された。それには頭を使う必要があるが、さいわい新聞・テレビ等があるので話題には事欠かない。特に三年前の政権交代後も話題続出で、ボケているヒマは無い。

平均的なサラリーマン三人分の年収を、毎月お小遣いとして親から貰っていた前々首相は、いかにも腹案があるかのように「悪くても県外」と確約し、代わった前首相は同窓なので余り悪くは言えないが、数百人の市民グループを引き連れた風情で、大金持ちから大貧民まで一億の国民が後ろに付いている事も気にせず、思いつき案を連発し、かっての安倍、福田、麻生元首相に続き、毎年首相が代わる風景が現れた。政権交代が成ったら、ようやく決まりかけていた普天間移設を気軽に反古にし、続いて消費税の導入にこれまで多くの内閣が倒れたことも忘れ、不要な発言で参院選に大敗した事から、この人達は当時何を見聞きし、勉強してきたのか不思議なことだ。単に「政権交代」と叫ぶだけが目標だったとしか思えない。

沖村浩史
東海大学名誉教授

普天間移設、消費税や原発問題も無いに越したことはない。しかし例えば中国の示す第二列島線は日本を越えた東南の太平洋上にあり、またボルネオ島すぐ北に位置する南沙諸島にまで領有権を主張していることから、わが国はチベット、ウイグル並みの日本自治区と見なされているようだ。

これらはいずれも「寝た子を起こした」ような形になっているので、その後の対応は容易ではなかろう。さらに前政権同様、放射能大臣、三つの答弁だけで務まる法相、博多の組長大臣まで出現した。一方、前政権も小泉元首相の希望通り壊れたままで、再生のきざしも見えないのは困ったことだ。それにしても阪神、東日本大震災共に、時の首相が革新系だった事は、被災者にとって悲運だったと言えよう。

「人間一生勉強だ」とよく言われるが、勉強とは教科書と鉛筆でやるのではなく、街の魚屋で人々が「勉強してよ」と言いながら買い物しているように、それぞれの人生に必要な情報を集め、工夫し生かすことにあると言える。

さらに最近六十から七十五才までの間で、知力・体力の衰えの少ない元気な人々が増加しつつあることから、既に人生八十年の時代となっている今日、若い多士済々の諸兄姉には、人生後半の約二十年をいかに充実して過ごすか、早くから心掛けておく必要があろう。

清澄庭園での同期交流会

渡辺正剛（昭和26年卒）

昭和26年卒東京同期会　濟々黌東京26会の名のもとに、例年、春は散策会を開催し、秋には総会兼懇親会を開催しています。

終戦の年に入学し、校舎を爆撃に焼かれ戦後の教育方針がままならぬなかで、歴史が否定され、全くままならぬ時代に、中学という大事な少年期を過ごしました。

学生改革で、中学は三年、新制高校で三年、計六年間を濟々黌で学んだ仲間であります。

東京地区の26会は30名近く集まっていましたが、満八十歳近くになると物故者や体調に不調を持つものが多くなり、近年は20名以下の会合となっています。特に一升酒を飲む豪傑は姿を消しています。この十年の懇親会の会場は、大江戸線の清澄白川駅前の清澄庭園の「涼亭」を利用しています。昼食を挟んでの4時間、実にのんびりとこの名庭園を前にして、雑談に耽っています。

この清澄庭園は、東京でも有数の名庭園として知られており、白鷺などの鳥類、亀や大小の魚が生き生きと泳いでいます。亨保年間に庭園のもとが造られたものであり近年では岩崎家の邸地として、全国から、伊豆、伊予、佐渡、真鶴、根府川などの名石が配置されていることでも有名です。昨年は、10月4日に藤田先生をお招きし、15名の懇親会を開催いたしました。出席者は次の通りです。藤田先生、片桐亨会長、檜逸夫、渡辺豊、東哲朗、井門繁、那須潔、大屋尚彦、井上浩気、永田令二、力丸研二、矢野亮一、平山澤枝、坂本勝之、渡辺正剛。

昨年は卒業60周年でもあり、熊本26会が主催した記念すべき旅行会が開催され、東京26会からも4名が参加しました。11月7日と8日の二日間にわたって開催され、出発に先立って、濟々黌にて記念撮影をし、約30分その昔を偲びました。大正2年、孫文も来校していることを知りました。

銀杏紅葉学舎昭和を遠くする　正剛

耶馬渓、羅漢寺、宇佐神宮を訪ね、双葉山の出身地、豊後高田でも一休みし、昭和館を訪ねました。別府温泉にて一泊し、飲みたい放題、歌いたい放題の一夜でありました。二日目は、地獄温泉を廻り、千年の臼杵石仏群にてたっぷりの時間を使いました。

また、忽然と現れた原尻の瀧には驚かされました。岡城を経由し、秋色濃い祖母山、傾山をながめながら、九州の山の深さを山頭火のように味わいました。最後は阿蘇神社に参拝し、これからの健康を神に祈りました。

阿蘇外輪蹴破るごとし秋の雷　正剛

制定100年記念本「黌歌百年」について

このたび、竹原崇雄先生が濟々黌黌歌に関する本「黌歌百年」を上梓された。黌歌制定100周年の記念の年に、このような本が刊行されたのは誠に意義深い。竹原先生は現在、熊本県立大学名誉教授であるが、昭和35年から同46年までの11年間にわたり濟々黌で教鞭を執られた。担当学科は国語である。先生は平成21年頃から黌歌の研究を始められ、このたびその成果をまとめられたのである。黌歌に関するあれこれは、この本に書き尽くされている。平成24年2月29日、出来上がったばかりのこの「黌歌百年」が卒業生、在校生の3学年全員に配布された。濟々黌同窓生、在校生、教職員の皆様、濟々黌と縁があった方々すべては、先生のこの研究を多とし、深甚の謝意を表すべきだろう。「黌歌百年」は一部300円。多士会館で販売中だ。

第四回 OBゴルフ学年対抗戦

平成23年7月3日快晴の中、関東地区OB51名が成田の総成カントリークラブにおいて熱戦の火ぶたを切りました。

競技の内容は卒業年次別対抗戦と新ペリア方式による個人戦で、卒業年次別対抗戦は3名のグロスを合計数で競いあいます。

OB会ゴルフ対抗戦も早いもので4回目を迎えますが、70才を越えた先輩の力強いショットに、ただ驚嘆するばかりです。

我々42年卒は万年2位で、どうしても10年も先輩の32年卒の先輩に勝てません。もうすぐ後期高齢者（失礼）になるというのに三人とも70台のスコアで驚愕するばかりです。

当日も今年こそ打倒32年を合言葉に臨みましたが、生憎32年卒の先輩は欠席で何か目標を無くしたことでかえって肩の力が抜け、そこそこのスコアでラウンドでき、鬼のいぬまに苦節4年、初めて42年卒が優勝しました。因みに優勝賞品は桃一個でしたが名誉をいただきました。

この会は全てが熊本弁で和気あいあい。因みにキャディさんには喧嘩している様に聞こえるらしいですが無事終えることができました。

栗崎泰爾（昭和42年卒）

優勝のS42年卒メンバー（左より本嶋公民、栗崎泰爾、加藤和憲）

なごやかな会食

参加メンバー集合写真